

2001年夏の成果

交告 尚史⁴

妻の実家が洲本にある関係で、毎年お盆前後の数日間を淡路島で過ごす。今年は7日から11日まで滞在した。神戸に住んでいたころは淡路島の夏は過ごしやすかったと思っていたが、少なくともここ2年は酷暑で、とくに今年の暑さはすさまじかった。雨もずいぶん長いこと降らなかったようである。

洲本を訪れると、まずは近くのおきまりのコースを歩く。塩屋から宇山を抜け、石が谷で山中に入り、厚浜の集落に出る。今年も8日にこのコースを辿ってみたが、ハチ以外の昆虫にはほとんどお目にかからなかった。石が谷の山の入り際でナミアゲハを一頭、それから厚浜の田圃道を国道28号線の方へ下る道すがら、少し山に入った林道でウラギンシジミの雄を一頭発見した。これがこの日の収穫のすべてである。いずれもスウェーデンの知人への贈物にすることにした。スウェーデンではアゲハ類はキアゲハ（向こうでは学名どおりマカオンと呼ぶ。日本のキアゲハより少し色が薄く柔和な印象）しかいない。ウラギンシジミは分布していない。

翌9日の午前中、大浜海岸の方からホテルの裏を三熊山に登った。昨年は八王子神社に向かう小径でアオバセセリがひらひらするのを見たが、今年はしっかり目を凝らしても見つけられなかった。山坂を登り切り、シロミノヤブムラサキの「檻」の処から西の丸方面に歩いていて、テングチョウに出くわした。さらにこの道を脱けた先の眺望の開けた処でまた一頭現われた。後で登日邦明氏に伺ったところでは、三熊山ではテングチョウの個体数は少ないそうである。ただし、西の丸方面では比較的よく観察できるとのこと。木造りのベンチなどが配された辺りをしばらく徘徊。夏にここに来れば必ず出会えるツマグロヒョウモンが今年もせわしく翔び回っていた。いつもならやり過ごすところだが、今回は先ほどのテングチョウとともにスウェーデン土産となった。

その日の夕方、宮滝市民の森に出かけた。生憎の曇天で昆虫との出遭いはあまり期待できなかったが、もしかすると思つて滝の横の林道中村線を少しばかり登った。そして、昨年にも増して水量の乏しい溪流に降りてみた。そこは昨年オジロサナエの番を採集した処である。私が一息入れている間に、息子が樹上に飛来した小さなトンボを捕ろうとして失敗した。息子が語ってくれた印象から、それはやはりオジロサナエであったように思われてきた。そこで翌10日の午前中、もう一度同じ場所に足を運んだ。途中樹間に幾度もテングチョウを見た。この一帯にはたくさんいるようである。さて、11時ごろ、前日息子が捕りそこなった木の傍で待ち受けていると、隣木の頂から、それと覚しきものが一頭地上1メートルあたりまで舞い降りてきた。まさしくオジロサナエであった。

オジロサナエは、溪流の全体を生息空間にしている昆虫である。川の上流で産まれた卵から孵化した幼虫が川を下り、下流で羽化した成虫は川沿いに山に登ると言われている（井上清・谷幸三「トンボのすべて」トンボ出版、1999年、97頁）。したがって、この稀少なトンボを後世に残すには、水系の全体を保全して、彼らの生息環境を維持していく必要がある。宮滝市民の森の入り口付近では、人々が水に親しめるよう河岸や河道にかなり手が加えられているが、自然の改変に際しては他の生物に対するきめ細かな配慮を怠ってはならない。

(こうけつ ひさし)